

はじめに

女流日記文学の嚆矢とされる『蜻蛉日記』は、二十一年間の結婚生活を悲嘆の色調をもって描き出していることから、道綱母が半生の憂いを綴り、人生を凝視しながら諦観を得ていったものと、これまで解されることが多かった。例えば、上巻では「兼家の妻として生きること自体の肉体的な苦しさが追求されており」、中巻では「作者が一人の妻として苦しみぬく心の根底に、もはや妻であることを越えた、人間の本质上に根ざす苦悩、人間存在そのものの苦悩が見いだされ」、また下巻では「愛に傷ついた女の諦観を含んだわびしい心象風景」が描出されると捉えられてきた。⁽¹⁾

近年、十世紀半ばにおける、藤原師輔の息子たちいわゆる九条流の貴公子の恋愛贈答歌を写し留める私家集の盛行を受けて、『蜻蛉日記』上巻には「兼家の詠草を記録するという事業への道綱母の協力」という重要な役割のあったことが論じられている。⁽²⁾ 論者も、古歌・漢詩文を巧みに撰取する表現や意図的な記事構成、また家庭内に一生を過ごした道綱母の書き物が広く読まれたことなどから、この観点を妥当なものと考ええる。その驥尾について本書では、『蜻蛉日記』の上巻のみならず下巻最終部へ至る全体が、夫と貴族読者の求めに応じて、九条流の貴公子藤原兼家との結婚生活の逸話と彼を恋い求める女の様相を〈兼家妻〉の立場で記し付けるものであり、また自分と道綱を兼家一族につながる存在として貴族社会に示し出そうとするものでもあったと述べていく。そ

ここにおいて、心の内奥に踏み込んで行く卓逸した表現世界は生まれ出ていると考える。

上巻当初の記事は、貴公子との恋愛贈答をめぐる文芸の盛行を背景とし、また兼家の求めに依って、求婚以後の贈答歌を他見に供するという比較的簡明な動機で書き綴られたものだった。それが兼家の親族や章明親王などの貴顕に読まれて、道綱母は新たな交際と知見を得ることになる。その社交の様相は『蜻蛉日記』のいわゆる上巻後半部以降に描き込まれている。歌をよくする〈兼家妻〉と彼らから認知されて彼らと社交することにより、家庭の内においては対社会的に自覚することのなかった〈兼家妻〉としての自意識が培われていく。道綱母はその認識に拠ってさらに書き綴り、それがまた兼家一族を中心とする貴族読者に読まれて反応を得るという運びにおいて、彼女のこの自己認識は強化されていった。

現在の上巻のようにまとめられて序跋文が付される時、「人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなん、天下の人の品高きやと問はんためしにもせよかし」（序文）と、この書き物には「天下の人の品高き」との関わりにおいて「ためし」となる意義が存すると意味づけられている。その頃には、兼家の妻として生活し交際する自分には書き記すべき存在価値があると認識しているのだ。

書いたものが読者に読まれ反応を得ることによって、兼家の妻としての自意識を培っていったのであり、それは書き重ね意味付け直していく独自の表現方法と密接である。また以上のことから、『蜻蛉日記』の主題といべきものは、その時の状況と自意識のあり方によって変化していると言えよう。

十一の論で、それぞれの記事の表現に即しながら『蜻蛉日記』の有りようとその形成について考察していく。

I 上巻における〈兼家妻〉としての社交の様相

ここでは上巻における、兼家の妻との自意識をもつての社交記事について検討する。

第一章「時姫との「真孤草」の贈答歌考——端午の節句時の交際として——」では、兼家の先妻時姫と思われる人物との贈答歌を読み解く。従来道綱母と時姫との齟齬が問題とされることが多かったが、端午の節句直前という折を捉えての妻同士の交流なのであり、ここでは、道綱母から先輩の妻に時節に合った洒落た歌を贈りかけたこと、そして時姫に兼家の妻として認められていたことが示されていると解する。

第二章「上巻の御代替わり考——兼家の妻としての行動——」では、村上帝から冷泉帝への御代替わり前後の記事に着目する。村上天皇崩御の直前に、道綱母は東宮妃怱子（兼家妹）へ和歌を添えた贈り物をして、それが「五の宮」（後の円融帝）に渡ったことが描かれる。前月に東宮亮になった兼家の妻として東宮妃の知己を得ようとするものであり、また五の宮とのつながりも表していると読み取れる。村上帝崩御の後には、その寵姫であり「東宮の御親のごと」でもあった藤原登子（兼家妹）と道綱母は和歌の贈答を交わし、また登子の隣に住んで社交をして、手の込んだ贈り物も届けている。政権変動期における、和歌の力をもつての道綱母の内助の功が描かれている。

『蜻蛉日記』上巻には、和歌の才をもつて、〈兼家妻〉の立場で貴顕を含む兼家の周囲の人々と社交する道綱母が示し出されているのだ。